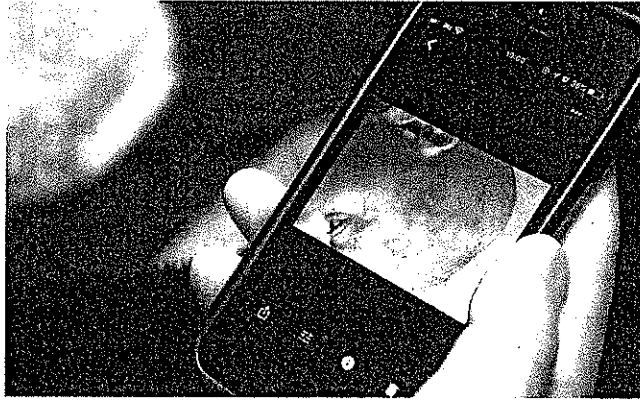


生活保護受け命つなく

抗がん剤治療中に、英二さん(仮名)がスマートフォンで撮影した自身の写真。「死の恐怖で眠れなかった」と振り返る。4月、福井市内



「公的支援の周知必要」

白血病を患い、生活の困窮により高額な薬代を払えず「余命3カ月」を宣告され、移植で一命を取り留めた福井市の男性(38)が、福井新聞の取材に対し、当時の思いなどを語り「生活保護など社会のセーフティネットをしっかり理解し活用する」ことが大事」と訴えた。元気を取り戻した今は、ファイナンシャルプランナーになって金銭的に困っている患者を救いたいと夢を抱く。(堀英彦)

困窮患者救う仕事は夢

■1日1万2千円 ■ 男性の英二さん(仮名)は2009年、30歳のとき、体がだるく眠い状態が続き病院に行った。慢性骨髄性白血病だった。1カ月ほど入院し、その後は薬を飲み続けた。保険を適用しても1錠3千円、1日4錠服用した。自己負担を軽減する高額療養費制度はあったが、当時は数カ月後に払い戻されるシステムだった。いったん金額を支払う必要があったがお金がなく、いろいろな薬局を回って「つげ」で購入した。ほとんど支払いは滞り、薬局回りもできなくなった。1錠を半分割って飲んだり、間引いて飲んだりしたが、結局1年ほどで薬をあきらめた。2013年12月、雨に打

たれ熱っぽくなったので病院に行くと、医師から「余命3カ月。来年のサクラは見られないでしょう」と告げられた。全日本民主医療機関連合会の16年の調査によると、医療費が払えず受診が遅れなくなった人は、福井県など28都道府県で58人上った。 ■抗がん剤治療開始 ■ 病院のスタッフはその日のうちに、薬代が無料になる生活保護の書類を持ってきた。「生活保護を受けたら人生の終わり」と思い込み、これまで何度も断ってきたが、どうしようもなくなり申請。無菌室での抗がん剤治療が始まった。死を覚悟し、家族に遺書も書いた。「命を削っても会いたい人には会う」と決めた。翌年5月までの入院期間に面会したのは、同級生や大好きな音楽仲間ら延べ150人。「友達がいなかったら、今の僕はいなかった。生きようという気が続かなかっただろう」と振り返る。

一通り治療が終わると、医師からの骨髄移植の抗がん剤治療の継続治療をやめるの選択を迫られた。結局、父親の血液から造血幹細胞を採取し、点滴で注入する移植を、県外の病院で受けた。現在は4週間に1回通院し薬を飲みながら、知り合いの鉄工所でパート勤務している。体力は回復したが、死の恐怖で眠れぬ夜を過ごした記憶がよみがえることもあり、睡眠導入剤は今も欠かせない。 ■寄り添っているか ■ 治療を通して「病院は薬と同じ」と感じた。行かなきゃ

何も教えてくれない。予約の日に行かなくても、催促があるわけでもない。「二人一人の患者に寄り添う医療になっているだろうか」という疑問は今もある。生活保護では、自治体同士の受け渡しに不備があった。県外の病院から福井に戻るとの引越した代を、自腹で出すように言われたが、弁護士に無料相談を受け解決した。英二さんは「社会にはいろいろな支援制度がある。生活保

護についても交通費支給とか家の修理とか、メニューはいっぱい。自分で制度を勉強して、病に立ち向かっていくしかない」と話す。一方で、以前の自分のように、制度の詳しい内容が知らずに泣いている人は多いとも思う。「貧乏だから死を迎えてしまうという現実がある。だからファイナンシャルプランナーの資格を取り、患者と役割、病院のパイプ役になりたい」と話す。